

国内福祉研修に参加して

私は、現代福祉学部の国内福祉研修制度を利用して、ハンセン病患者のための療養所である『国立療養所沖繩愛楽園』で研修をさせて頂きました。以前からハンセン病というテーマについて学びたいと考えており、その際、日本におけるハンセン病の歴史の中で欠かすことのできない強制収容時代の象徴である療養所を訪れることに大きな意味があると思ったからです。

ハンセン病に興味を持ったのは、数年前にハンセン病の回復者である伊波敏男さんの講演を拝聴したことがきっかけです。その後伊波さんの著作も拝読し、ハンセン病という病気がとても特殊な形で多くの人に大きな影響を与えていたことを知りました。そこで今回、伊波さんが中学生時代を過ごされた愛楽園で研修をさせて頂きたいということを伊波さんにお話し、愛楽園の自治会長である金城さんと愛楽園福祉課の方にご協力頂き、このテーマに関心を持ってくれた友人3人と共に2泊3日の研修を行いました。研修の日程は、福祉課の職員の方が組んで下さいました。

研修1日目は園長先生のお話、自治会長さんのお話を伺い、愛楽園の歴史のDVDを鑑賞、その後職員の方に園内を案内して頂きました。園長先生には、ハンセン病とはどのような病気なのかということ、入居者の方がどのような生活をされているのかということ、療養所に併設されている診療所で行われている治療の内容などをお話して頂きました。入居者の方の平均年齢が高いことから、ハンセン病そのものの治療というよりも、リハビリや高齢者特有の生活習慣病の予防などが主に行われているということでした。また、日本における新たなハンセン病患者は年に1人未満であり、効果的な治療法も既に確立されているため、早期に治療を開始すれば後遺症が残ることもほとんどないそうです。

2日目の午前中は、看護部長さんのお話をお聞きした後、治療棟と生活棟の見学をさせて頂きました。部屋は全て個室になっており、内装も一般的な住居と変わらない様子でした。病室のように無機質な部屋をイメージしていたので、とても驚きました。夫婦で入居されている方もいました。各部屋には担当の看護師・介護士の方がおり、認知症を患っている入居者の方でも担当者の顔を覚えられるような工夫がされていました。各部屋に備え付けられているナースコールの形状や手すり、滑り止め等もその部屋の入居者に合わせられていて、スタッフと入居者の距離が近いことがよく分かりました。

このとき、何人かのお部屋にお邪魔し、居室内でのマッサージやリハビリの様子、室内の様子を見せて頂きました。当然初対面であるにも関わらず、皆さんがとてもにこやかに迎え入れてくださり、声を掛けて下さいました。私たちはとても緊張していたので、そのことにとっても驚き、また嬉しくなりました。担当の看護師さんも「おじいちゃんやおばあちゃんの家に来たように過ごせばいいのよ」とおっしゃってくださり、温かい雰囲気でした。

その後食事の介助を体験させて頂き、リハビリを兼ねたレクリエーションである座った状態でのバレーボールにも参加しました。私が食事介助をさせて頂いた女性は全く目が見えない方だったのですが、私の食事や宿泊場所まで気遣ってくださり、ご自身の経験や別の療養所にいるご友人のお話もしてくださ

いました。バレーボールでも、近くに座っている方皆さんが大変温かく接して下さり、普段の暮らしのこと、家族のこと、共に生活している療養所の皆さんのことを話して下さいました。

今回の研修で得た一番大きなことは、やはり入居者の皆さんや療養所で働くスタッフの皆さん、療養所の未来のために行動されている自治会の皆さんのお話を聞くことができたことではないかと思います。研修に行くまで無意識のうちに持っていた先入観が尽く覆されたことが大きな衝撃でした。これは、実際にその場所を訪れ、短い時間ではありましたが生活を共にし、生の声を聞くことが出来たからこそ、今後の学習に繋がるモチベーションを得ることが出来たのではないかと思います。現にその後、もう一人のメンバーと共に東村山市にある国立ハンセン病資料館へ行きました。

また、この研修を実現させるために、自分たちで一から日程や研修施設を決め、関係者の方とコンタクトを取り、交通手段を調べ、同時にハンセン病についての事前学習を行うという行程を踏んだことも、今後必ず役に立つと思います。観光旅行でもなく、あらかじめ組まれたツアーでもない研修のプランを立てるのは、不慣れなことも多く時間もかかりましたが、貴重な経験となりました。国内福祉研修は、様々な面で自分自身を成長させるよい機会だと感じました。最後になりましたが、ご協力頂いた皆さんに心から感謝したいと思います。